

アジア・アフリカ学術基盤形成事業 平成23年度 実施報告書

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	聖路加看護大学
タンザニア拠点機関：	ムヒンビリ健康科学大学

2. 研究交流課題名

(和文)： タンザニアの母子保健改善に貢献する持続的な若手研究者の育成
(交流分野： 母性看護・助産学)

(英文)： Sustainable development of novice researchers who will contribute evidence based midwifery for the promotion of maternal child health in Tanzania
(交流分野： Maternal Infant Nursing & Midwifery)

研究交流課題に係るホームページ：<http://www.ap.slc.n.ac.jp/mt5/asia-africa-jp/>

3. 開始年度

平成23年度(1年目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：聖路加看護大学

実施組織代表者(所属部局・職・氏名)：学長・井部俊子

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：母性看護、助産学・教授・堀内成子

協力機関：

事務組織：聖路加看護大学事務局

相手国側実施組織(拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

国(地域)名：タンザニア ダルエスサラーム

拠点機関：(英文) Muhimbili University of Health and Allied Sciences (MUHAS)

(和文) ムヒンビリ健康科学大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：

(英文) School of Nursing・Professor・Sebalda Leshabari

協力機関：(英文) Tanzania Midwives Association

(和文) タンザニア助産協会

5. 全期間を通じた研究交流目標

タンザニアでは妊産婦死亡率が非常に高く、産科医療のアクセス・質の低さに関する問題が山積している。母子保健問題の改善という緊急性の高い社会的なニーズに対応すべく、母子保健を専門に研究教育活動ができる若手研究者の育成が急務であり、助産学専門の修士課程の設立が強く求められている。本研究交流では、「アジア・アフリカ助産研究センター」という共同研究拠点を形成し、交流を通して東アフリカ初となる助産学専門の修士課程をタンザニア・ムヒンビリ健康科学大学に設立する。

タンザニアと日本の助産教育の理念は、「エビデンスに基づいた安全な自然分娩を促進する」点において共通している。日本の助産高等教育は、聖路加看護大学大学院看護学研究科において、1983年度より修士課程が設けられており、助産学の教育者および研究者を数多く輩出してきた実績がある。本研究交流では、日本の持つ知識、人材や経験を移転するだけでなく、タンザニアの健康問題に合ったカリキュラム編成を行う。タンザニア国内で助産学専門の大学院教育を確立することによって、タンザニア人助産師が自国の保健問題改善に向け活動できる能力を育成し、タンザニアの母子保健分野の自立発展性を高めることを目指す。

またセミナー等学術会合を通し、設立する大学院修士課程の教員、助産師学校の教員グループや臨床現場の助産師にも学びの場を提供する。同時に日本の助産高等教育においても、助産師が国際的な視野を持ち、活動を展開する能力を養うことを目標としている。本研究交流で、日本人の若手研究者が国際的な活動の場やネットワークを広げ、今後共同研究などを行う基盤を作ることを目標としている。

6. 平成23年度研究交流目標

【研究協力体制の構築】

アジア・アフリカ助産研究センターを立ち上げ、ムヒンビリ健康科学大学との研究協力体制を構築する。日本側、タンザニア側の参加研究者同士の交流を通し、今後の研究活動に向けて信頼関係を築き、共通の目標を確認する。

【学術的観点】

タンザニアの若手研究者の学術面での人材育成を目的とした修士カリキュラムと評価基準を作成し、カリキュラム施行後に評価研究を行う基盤を形成する（R-1）。また、聖路加看護大学で修士課程を修めたタンザニア人若手研究者の研究活動の発展させるため、本学修士課程で行ったタンザニア都市部で行われた思春期学生への性教育プログラムを発表し、その後農村地区に応用した比較研究を行う準備を始める（R-2）。

【若手研究者養成】

国際助産師連盟（ICM）南アフリカ大会と聖路加看護大学においてセミナー・交流事業を行い、日本・タンザニア両国の若手研究者に対して相手国研究者との交流の機会と両国の助産教育と実践、共同研究について学ぶ機会を設ける。タンザニア側には、日本の教育機関における修士課程の視察、日本人研究者の講義を受ける機会及び発表の機会を設ける。

【課題独自の今年度の目標】

本研究交流の初年度として、共同研究・セミナー・交流を通し、両機関研究者の理解と信頼を深めるとともに、ムヒンビリ健康科学大学における助産修士課程の次年度開設を目指して事業基盤を形成する。また、日本、タンザニア両国の若手研究者が、交流研究活動を通し、研究者に必要なコンピテンシーを高めるための学びの機会を設ける。

7. 平成23年度研究交流成果

(交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めて下さい。)

7-1 研究協力体制の構築状況

聖路加看護大学にアジア・アフリカ助産研究センターを立ち上げ、ビジョン、ミッション、概要を明確にし、相手国との協力体制の土台を築いた。両国の研究者が南アフリカで開催された国際助産師連盟（International Confederation of Midwives）の三年毎大会に参加し、共同研究やカリキュラム作成について話し合い、共通の目的やゴールを確認することができた。

相手国コーディネーターであるセバルダ・レシャバリ氏を招聘し、相手国の母子保健・助産教育についての課題をセミナーにて講演してもらうことで、相手国の現状に対する国内研究者の理解が深まった。

日本国の助産教育・実践を見学してもらうことで、その課題に日本における助産教育・実践がどのように応用できるか、アイデア構築の機会となり、協働で相手国側の助産修士課程カリキュラムを作成することができた。その後相手国大学看護学部の学部長を招聘した際に、今年度後半から来年度にかけての具体的な共同活動や、相手国において作成したカリキュラムに承認を得るプロセスを確認することができた。

交流活動については、アジア・アフリカ助産研究センターのホームページやニュースレターの配信、また公開セミナーや雑誌掲載によって広く周知することができた。

両国の学術協定は2010年に結ばれ、本事業により本格的な共同活動を開始したところであるが、初年度として順調に協力体制を構築することができ、今後の活動に向けて大きな成果が得られた。

7-2 学術面の成果

初年度である本事業では、今後の研究活動の基盤となる準備を行った。R-1では、助産修士課程のカリキュラム案を完成させ、MUHASを通じて、関連する人々との会議（ステークホルダー会議）を行い、タンザニア国内に周知できた。これは、タンザニア初の助産修士課程を立ち上げるには大きな一歩であった。アフリカの助産師を育成するための助産修士カリキュラムの共同開発のプロセスは、他の機関や国へ与える知見も大きいと考えられ、国際保健医療学会学術大会での発表を行い、現在学術雑誌への投稿準備中である。

実際に、国際助産連盟の南アフリカ大会で、本事業について公表した際、タンザニア以外の国からの共同プロジェクトの申入れが複数あった。

R-2 に関しては、聖路加看護大学で修士課程を修めたタンザニア人若手研究者が修士論文を海外学術誌に発表する過程をサポートし、発表に至った (Frida Madeni, Shigeko Horiuchi, and Mariko Iida: Evaluation of a reproductive health awareness program for adolescence in urban Tanzania – A quail-experimental pre-test post-test research, *Reproductive Health* 2011, 8:21 doi: 10.1186/1742-4755-8-21)。更に次の研究計画である思春期学生への性教育プログラムを農村地区に応用する研究に際し、農村地区の選定、計画書作成、倫理審査の調整を行っている。

7-3 若手研究者養成

国際助産師連盟南アフリカ大会において、日本国側博士研究員がタンザニアで行った博士研究を発表し、同時に本事業の開始を公表した (Yoko Shimpuku, Mothers' Perceptions of childbirth experience at a hospital in rural Tanzania. ICM Triennial Congress, Durban, South Africa. May 2011 : ref 472.)。アフリカで開催された大会のため、多くのアフリカ系助産研究者が参加しており、アフリカの母子保健・助産活動に対する意見交換を行うことができ、本事業に対する建設的な意見をもらうことで、今後の事業計画に反映することができた。

日本においては、相手国側若手研究員を2名と学部長1名を招聘し、日本側機関の助産教育課程や大学院教育制度、コクランレビューといった助産研究者の活動や日本のバースクリニックや助産院における活動を紹介し、人材が少なく出産の多いタンザニアにおいて、それらをどのように応用可能かが話し合われ、強いインスピレーションを与えることとなった。

また、日本で開催された公開セミナーでは、タンザニア人研究者の発表により、日本側若手研究者がタンザニアの母子保健・助産の実際を学ぶことができた。

7-4 社会貢献

本事業の最終的な目的は、高い妊産婦死亡率の続くタンザニアにおいて、助産教育を改善し、大学院教育を推進することで、Women-centered Care (女性中心のケア)、Evidence-based Practice (エビデンスに基づいた実践) の概念に沿った臨床助産ケアの改善と妊産婦の健康の改善である。なかなか改善されないタンザニアの高い妊産婦死亡率の問題は、臨床的なケアの質の問題にとどまらず、女性のジェンダーの問題、貧困、教育といった様々な因子が入り組んでおり、一朝一夕に改善するものではない。持続的にこの問題に取り組んでいくには、現地の助産・リプロダクティブヘルス研究者の育成が急務であり、それも一人二人でなく、持続的に育成していく必要がある。

本事業でムヒンビリ健康科学大学に助産修士課程が立ち上がることで、これまで修士課程で学ぶためにはタンザニアでは稀な海外留学の機会を待つしかなかった助産師が国内で進学可能になり、海外留学することでブレインドレインという海外に優秀な人材が流出する問題の改善に寄与すると考えられる。さらに彼女らが高度臨床技術を得るに留まらず、

研究、教育、マネージメントといった能力を得ることで、タンザニアの母子保健・助産分野の発展、拡大を望むことができる。

本年度作り上げた助産修士カリキュラムはその第一歩であり、相手国研究者との話し合いから、多くの助産師が進学を待ちわびていることを伝え聞いている。タンザニアの社会的に広く求められている事業と言える。また、タンザニアに限らず、助産ケアの改善を望む多くの発展途上国に、意義の高い示唆を与えることになる。

7-5 今後の課題・問題点

日本とタンザニアでは、研究者の研究以外の責務の内容・量、経済的余裕や研究費獲得の機会など、多くの点で環境的諸条件を大きく異にしている。特にタンザニア側の教員不足による過重労働や物資不足、インフラの問題（停電やガソリン不足による労働環境の不整備）によって、予測外に事業の進行にも影響することがあった。学部長の来日時期や期間など、計画変更を余儀なくされる状況もあったが、両国側が柔軟に対応したため、予定していた交流活動を実施し、目標を達成することができた。今後も事業の進行には両国間の密な連絡と、細心の注意を払うとともに、不測の事態には柔軟に対応し、両国側にとって弊害のない形で、年度ごとの事業計画が遂行されることを考えていかねばならない。

また、相手国側も本事業以外の資源を模索し、機会があればコンタクトを取るなどの努力は行っているが、本事業のような助産大学院教育といった内容での資源獲得は難しい状況がある。

今後も、相手国には資源確保に尽力してもらい、その際に必要な知識的サポートは日本語側も提供する。本年度、研究交流基盤のカギとなる相手国側学部長が来日したことにより、計画遂行を具体的に話し合ったことで後半の事業展開が進むこととなり、以後もこういったコミュニケーションを続けていく必要がある。

7-6 本研究交流事業により発表された論文

平成23年度論文総数 0本

相手国参加研究者との共著 0本

(※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)

(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

8. 平成23年度研究交流実績概要

※「10. 平成23年度研究交流実績状況」の概要について記載してください。

8-1 共同研究

本年度より、聖路加看護大学にアジア・アフリカ助産研究センターを立ち上げ、助産研究に関するグローバルコミュニケーションの拠点とし、ネットワークの構築を図った。相手国機関であるムヒンビリ健康科学大学とも、国際会議の席や本学への招聘により直接的な話し合いの機会を重ね、次年度から現地での研究活動を開始する基盤づくりを行った。

R-1の若手助産研究者の育成に際して最も重要な基盤となるカリキュラム、シラバス、評価基準の作成を成し遂げ、タンザニア国内でのステークホルダーミーティングでタンザニア保健省、助産協会、医師会、教育者や臨床家の承認を得、修正点を確認し、承認の最終段階であるムヒンビリ健康科学大学内での承認を得るプロセスに入るに至った。その話し合いを通し、ムヒンビリ健康科学大学の教員／研究員と本研究で向かう目標と方法を確認し、信頼を深めた。同時に R-2 の性教育プログラムを実施する地区の選定や計画書の修正を行い、次年度から研究活動を開始する準備を行った。

初年度であり、双方の規定に沿う形での事業展開を模索することは単純ではなかったが、それを乗り越え基盤を作り上げたプロセスは他の海外事業にも示唆を与えられるものと考え、国際保健医療学会学術大会で発表した (Yoko Shimpuku, Shigeko Horiuchi, Shebalda Leshabari, Miwako Matsutani, Hiromi Eto, Yasuko Nagamatsu, Michiko Oguro, Collaboration between Japanese and Tanzanian Midwives to Develop the First Midwifery Master's Course in Muhimbili University of Health and Allied Sciences, Tanzania: A Case Report. 第26回国際保健医療学会学術大会 第52回熱帯医学学会学術大会 合同大会. 東京大学: 2011年11月) (本研究事業によると明記した)。

Women-centered Careに関する研究方法の文献レビューも学術誌に投稿し、査読中である。なお、事業と関連した研究論文 (特に最新の知見を示したもの) の情報や、本事業のセミナー、交流事業の経過報告を含め、随時ホームページ上で情報発信を行っている。

8-2 セミナー

計画通り、計3つのセミナーを日本側拠点機関で行った。S-1は19名、S-2は28名、S-3は15名の参加者があり、日本側拠点機関からは研究者、大学院生 (インドネシア人留学生含む) が参加し、また外部機関研究者、国際保健に関わる助産師、途上国写真家等、幅広い参加者が集まった。

S-1では、相手国側代表セバルダ・レシャバリ博士による、タンザニアの助産教育、実践、研究の現状と、今後の大学院教育による若手助産研究者の育成の必要性について講演を行い、日本の教員がカリキュラム作成の援助をする上での基礎知識を得た。

S-2では、米国ラトガース大学看護学部学部長ウィリアム・ホルツマー氏を招聘し、同氏が経験してきた国際共同研究、研究者としてのコアコンピテンシーを確認し、教育研究者

育成上のカリキュラム必須要素についての提言を受けた。日本・タンザニア両国の中心研究者が、グローバルな大学院教育の基準を学ぶ機会となり、今後のカリキュラム作成における重要なアカデミック・コンピテンシーについて討論する機会となった。

S-3では、「Women-centered care と Humanization of childbirth」を中心概念としたカリキュラム原案とタンザニア助産修士課程発足までの道のりをアクションプランとして発表し、参加研究員同士が共通の目標と共同過程、また「Evidence-based practice」を組み込んだ原案修正について確認することができた。一連の流れとして、カリキュラム修正案にまで進む豊かな学びの場が提供できた。

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

南アフリカで行われた国際助産師連盟の学術大会に両国側から出席し、本年度の目的である助産修士課程カリキュラム作成について、タンザニアの国の状況を踏まえ話し合った。その後、助産修士課程をすでに持つ日本の助産教育やその実践を理解した上でのカリキュラム作成を目指し、7月と9月の2度に渡り、計4名のタンザニア側研究者が来日した。日本のバースクリニックや助産施設を見学し、助産師主導型の施設というタンザニアにはないモデルを目の当たりにし、助産師不足が深刻なタンザニアではあるが、早期退職した熟練助産師の雇用や、助産師主導の妊婦クラス開催など、工夫次第で応用できるのではないかといったアイデアを引き出すことに繋がった。

また、滞在期間中に日本側研究者が講義を行ったが、内容を伝えるだけでなく、研究者同士の交流を図った。タンザニア側研究者は講義の間も積極的に日本の助産について質問し、自国に当てはめて話したため、日本側研究者もよりタンザニアの助産の教育・実践の実際を学ぶに至り、計画通り良好な交流を行うことができた。9月に来日した学部長は、一連の交流を終えた最後に、「我々が目指すべき“光”を聖路加看護大学で見つけることができた」と述べている。タンザニア助産研究者たちは、高い妊産婦死亡率、深刻な教員・助産師不足、劣悪な労働環境など様々な母子保健問題に直面しているが、この交流を通して、問題に立ち向かっていくタンザニア側のリーダー達との交流基盤を形成することができ、彼らが進みたいと考える道やアイデアを構築するための情報共有も行うことができた。その後も随時インターネットを通じ交流している。

9. 平成23年度研究交流実績人数・人日数

9-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元		日本 〈人/人日〉	タンザニア 〈人/人日〉	アメリカ 〈人/人日〉	南アフリカ 〈人/人日〉	〈人/人日〉	合計
日本 〈人/人日〉	実施 計画				1/7 (1/7)		1/7 (1/7)
	実績						1/7 (1/7)
タンザニア 〈人/人日〉	実施 計画	6/70 (1/2)			1/7		7/77 (1/2)
	実績	4/46 (1/2)					1/7
アメリカ 〈人/人日〉	実施 計画	1/2					1/2
	実績	1/6					1/6
〈人/人日〉	実施 計画						
	実績						
合計 〈人/人日〉	実施 計画	7/72			2/14		9/86
	実績	5/52 (1/2)			2/14		7/66 (2/9)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。(合計欄は()をのぞいた人・日数としてください。)

9-2 国内での交流実績

実施計画	実 績
3/3 〈人/人日〉	3/5 〈人/人日〉

10. 平成23年度研究交流実績状況

10-1 共同研究

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-1	研究開始年度	平成23年度	研究終了年度	平成25年度	
研究課題名	(和文) タンザニアの助産若手研究者育成カリキュラム作成と評価					
	(英文) Curriculum development and evaluation of novice midwifery researchers in Tanzania					
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授					
	(英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor					
相手国側代表者 氏名・所属・職	Sebalda Leshabari, School of Nursing, Professor					
交流人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流					
	派遣先		日本			計
	派遣元		<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
	日本	実施計画				
	<人/人日>	実績				
	タンザニア	実施計画	2/20			2/20
	<人/人日>	実績	4/12			4/12
		実施計画				
	<人/人日>	実績				
	合計	実施計画	2/20			2/20
<人/人日>	実績	4/12			4/12	
② 国内での交流					0/0 人/人日	
23年度の研究交流活動	<p>タンザニアを含めた東アフリカで初となる助産学修士課程を設立するため、そのカリキュラムを共同作成した。研究者として育成すべきコンピテンシーを基に、日本の助産研究者育成の修士課程からタンザニアで応用可能なコース選定し、ムヒンビリ教員と共同でタンザニアの助産師が取り組むべき健康問題に優先順位をつけ、それに沿って必修・選択授業を作成した。同時にシラバスと学習評価基準を作成し、次年度以降の評価研究の基盤を形成した。その後、タンザニア側研究者は自国で学内会議を開き、カリキュラム原案に修正を加えた。</p> <p>タンザニアにおいてワークショップを開催し、作成したカリキュラムをタンザニア助産教育に関わるステークホルダー（保健省担当、助産協会、</p>					

	医師会、他大学の助産教員、臨床助産師、開発援助機関) に示し、意見をもらった。カリキュラムの施行に向け、ムヒンビリ健康科学大学側の許可を得るための手順に入った。
研究交流活動 成果	<p>① 研究者に必要なコンピテンシーに基づき、日本の助産研究者育成の修士課程から、タンザニアで応用可能なコースが選定された。</p> <p>② タンザニアの助産領域の健康問題に対応した、ムヒンビリ健康科学大学の助産修士課程のカリキュラム原案とそのシラバスを作成した。アドバイザーである William Holzemer 博士の助言により、エビデンスに基づいた実践 (Evidence-based practice) を主軸としてカリキュラムとした。</p> <p>③ 授業の学習評価方法・基準を作成した。</p> <p>④ 作成されたカリキュラムがタンザニアの助産教育に関わるステークホルダーによって吟味され、意見をもらい、了承を得ることで、カリキュラムがタンザニア初の助産修士課程として認定されるプロセスを促進した。国内で認定されることにより、将来的にそのカリキュラムで育成された若手研究員が、修士課程修了後のキャリアを形成するための基盤を形成した。</p> <p>⑤ ステークホルダーミーティングで修士課程を開始するための準備や学生の選定基準などが話し合われた。修士課程施行までに来年度準備する重要項目として、臨床実習指導者のトレーニングが挙げられた。</p> <p>※計画では7月に研究者2名(相手国代表と学部長)招聘時のみR-1の活動をし、9月には若手2名を招集し交流のみを行う予定であったが、カギとなる相手国側の学部長が7月に来日できず、9月に来日したため、9月にも若手を含めR-1の活動を行ったため、計画より参加人数が増えた。</p>
日本側参加者数	
	6 名 (13-1 日本側参加者リストを参照)
タンザニア側参加者数	
	5 名 (13-2 タンザニア側参加研究者リストを参照)

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 23 年度	研究終了年度	平成 25 年度	
研究課題名	(和文) タンザニアの思春期男女への性教育プログラムの評価：都市部と農村部の比較					
	(英文) Sex education program for adolescent boys and girls in Tanzania: A comparative study between city and rural areas					
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授					
	(英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor					
相手国側代表者 氏名・所属・ 職	Sebalda Leshabari, School of Nursing, Professor					
交流人数 (※日本側予算 によらない交流 についても、カ ッコ書きで記入 のこと。)	① 相手国との交流					
	派遣先		日本	タンザニア		計
	派遣元		<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
	日本	実施計画				
	<人/人日>	実績				
	タンザニア	実施計画	(1/2)			(1/2)
	<人/人日>	実績	(1/2)			(1/2)
		実施計画				
	<人/人日>	実績				
	合計	実施計画	(1/2)			(1/2)
<人/人日>	実績	(1/2)	(1/2)			
② 国内での交流		0/0	人/人日			
23年度の研 究交流活動	<p>聖路加看護大学修士課程助産学専攻の修了生によりタンザニア都市部で行われた思春期男女に対する性教育プログラムを、本研究交流日本側コーディネーターと修了生が学術誌に英文投稿し、発表した。(Frida Madeni, Shigeko Horiuchi and Mariko Iida, Evaluation of a reproductive health awareness program for adolescence in urban Tanzania-A quasi-experimental pre-test post-test research, <i>Reproductive Health</i> 2011, 8:21 doi:10.1186/1742-4755-8-21, 本事業との関連明記せず)</p> <p>都市部で思春期男女に行われた性教育プログラムを農村地区に応用するため、最初にプログラムを施工する農村地区の選定、プログラムの修正・変更、計画書作成、倫理審査の追加申請書類の作成を行った。</p> <p>本年度の活動を通し、次年度から開始されるムヒンビリ健康科学大学助</p>					

	<p>産修士課程の中で、学生による農村地区での教育演習の実現可能性、実行時の注意点などを探索した。共同研究として最終的には都市部と農村部の比較を行うことを目指す。</p> <p>※R-1 で来日時2日をR-2の話し合いに使った為、R-2として費用計上せず。</p>
研究交流活動成果	<p>① 本研究の先行課題である聖路加看護大学修士課程修了生の研究が学術誌に掲載された。</p> <p>② 農村地区は、ムヒンビリ健康科学大学が研究地区として承認を受けているバガモヨ地区と設定し、その地区の特性に合わせてプログラム、研究計画書、倫理申請を修正、提出し、次年度からの研究開始の基盤を作り上げた。</p> <p>③ 聖路加看護大学修士課程修了生も共同研究に対し、データ収集の協力や専門知識の提供を行うことで、研究者のコンピテンシーを高める研究経験を積むことができています。</p> <p>④ 日本側若手教員も本研究に参加することで、タンザニアにおいて研究の実現可能性を高めるために地区の選定が大切であることを学び、研究計画や倫理審査の方法を学ぶことができた。</p>
日本側参加者数	
	2 名 (13-1 日本側参加者リストを参照)
タンザニア側参加者数	
	1 名 (13-2 タンザニア側参加研究者リストを参照)

10-2 セミナー

—実施したセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業 タンザニアでの助産教育、実践、研究の紹介
	(英文) JPSP AA Science Platform Program Introducing Midwifery education, practice, and research in Tanzania
開催時期	平成23年 7月 5日 ~ 平成23年 7月 5日 (1日間)
開催地(国名、都市名、 会場名)	(和文) 日本、東京、聖路加看護大学
	(英文) Japan, Tokyo, St. Luke's College of Nursing
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授
	(英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	
	B.	
	C.	4/4
タンザニア 〈人/人日〉	A.	
	B.	1/1
	C.	
合計 〈人/人日〉	A.	
	B.	1/1
	C.	4/4

A. セミナー経費から負担

B. 共同研究・研究者交流から負担

C. 本事業経費から負担しない(参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。)

セミナー開催の目的	相手国機関ムヒンビリ健康科学大学助産学教授であり、タンザニア助産協会の事務総長であるセバルダ・レシャバリ博士から、タンザニアの助産教育、実践、研究の現状と、今後の大学院教育による若手助産研究者の育成の必要性についての講演を受け、日本の教員がカリキュラム作成の援助をする上での基礎知識を得る。また、国際助産に興味のある研究員、院生や学生も参加し、日本側の若手研究者に対する国際協働の実態を学びの機会を与える。		
セミナーの成果	<p>① レシャバリ博士がタンザニアの助産教育、実践に加え、自身の博士研究である HIV/AIDS の母子感染予防のためのカウンセリングについて講演してくださり、参加加研究者がタンザニアの母子保健状況について、タンザニアの助産の教授から直接知識を得る貴重な機会となった。</p> <p>② セミナーを公開としたため、参加研究者に限らない国際助産に興味のある日本の若手研究者がタンザニアの母子保健状況、特に助産教育、実践、研究についてタンザニアの助産の教授から直接知識を得る貴重な機会となった。</p> <p>③ 参加研究者の行う先進的な国際協働活動の実際を周知し、参加した若手研究者が学ぶ機会となった。</p>		
セミナーの運営組織	聖路加看護大学参加研究員、事務局		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容	金額
		その他経費（交流会費）	104,400 円
		謝金（アルバイト）	10,000 円
		※タンザニア 1 名の招聘費用は R-1 に含まれる。	
	タンザニア 国（地域）側	内容	金額
	（ ） 国 （地域）側	内容	金額

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業 研究者に必要なコンピテンシーと教育課程
	(英文) JPSP AA Science Platform Program Competencies of researchers and its educational program
開催時期	平成 23 年 7 月 11 日 及び 平成 23 年 7 月 13 日 (2 日間)
開催地 (国名、都市名、 会場名)	(和文) 日本、東京、聖路加看護大学
	(英文) Japan, Tokyo, St. Luke's College of Nursing
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授
	(英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)	
	A.	
日本 〈人/人日〉	B.	
	C.	5/10
	A.	
タンザニア 〈人/人日〉	B.	1/2
	C.	
	A.	1/5
アメリカ 〈人/人日〉	B.	
	C.	
	A.	1/5
合計 〈人/人日〉	B.	1/2
	C.	5/10

A. セミナー経費から負担

B. 共同研究・研究者交流から負担

C. 本事業経費から負担しない (参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。)

セミナー開催の目的	米国ラトガース大学看護学部学部長ウィリアム・ホルツマー氏を招聘し、同氏が経験してきた国際共同研究、日本、米国での大学院生教育を踏まえ、教育研究者育成に必須のカリキュラム（アカデミックな研究の組み立て方、論文の書き方など）についての提言を受け、研究者としてのコアコンピテンシーを確認する。		
セミナーの成果	<p>① アジア・アフリカ助産研究センター事業として今後タンザニアの助産修士カリキュラム作成に関わる研究者（日本・タンザニア両国の中心研究者が参加）が、グローバルな大学院教育の基準を学ぶ機会となり、今後のカリキュラム作成における重要なアカデミック・コンピテンシーについて討論する機会となった。</p> <p>② タンザニア内で初めての助産修士課程設立となるため、タンザニア側研究者がホルツマー氏の経験から学ぶことで、自国の教育課程・健康問題に合う大学院教育創設という課題に、具体的なイメージを持つことができた。</p> <p>③ 現在大学院教育を受けている院生にとっても、世界の大学院教育のレベルを知る機会となり、研究者としてのコンピテンシーに基づき、自らが課程在籍中に更に発展させるべき能力について考える機会となった。研究課題に関する討論では、教授の下で研究資金の助成を受けることができる課題を選択することと、独立した研究者として自分の道を切り開くことにおけるそれぞれの利点と難しさについて議論が展開した。</p>		
セミナーの運営組織	聖路加看護大学参加研究員、事務局		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容	金額
		外国旅費（ホルツマー氏）	710,920 円
		謝金（ホルツマー氏基調講演 2 回分）	100,000 円
		謝金（アルバイト 2 名）	20,000 円
		その他の経費（セミナー飲み物代）	10,103 円
	タンザニア 国（地域）側	内容	金額
	（ ） 国 （地域）側	内容	金額

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業 アジア・アフリカ助産研究センター共同プロジェクトのアクション プランとその評価
	(英文) JPSP AA Science Platform Program The action plan and evaluation of the collaborative project at the Center of Asia Africa Midwifery Research
開催時期	平成 23 年 7 月 14 日 ~ 平成 23 年 7 月 14 日 (1 日間)
開催地 (国名、都市名、 会場名)	(和文) 日本、東京、聖路加看護大学
	(英文) Japan, Tokyo, St. Luke's College of Nursing
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授
	(英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	
	B.	
	C.	4/4
タンザニア 〈人/人日〉	A.	
	B.	1/1
	C.	
アメリカ 〈人/人日〉	A.	1/1
	B.	
	C.	
合計 〈人/人日〉	A.	1/1
	B.	1/1
	C.	4/4

A. セミナー経費から負担

B. 共同研究・研究者交流から負担

C. 本事業経費から負担しない (参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しない)

てください。)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>両機関教員によるカリキュラム検討の成果、ムヒンビリ健康科学大学教員が日本の大学院教育や産科施設の視察を通じて得た知見を生かし、どのように自校の助産修士課程を作り上げていきたいかについて、アクションプランとして発表してもらう。 そのアクションプランに対し、アドバイザーリーボードより評価コメントを受ける。</p>	
<p>セミナーの成果</p>	<p>① タンザニア側研究者が日本滞在期間に授業や産科施設見学、カリキュラム作成会議、研究者交流を通して得た知見についてまとめ、「Women-centered care と Humanization of childbirth」を中心概念とし、これらをタンザニアの状況にいかに応用できるか、というこれからの共同プロジェクトの方向性を確認する重要な機会となった。</p> <p>② カリキュラム作成について、日本滞在期間における協議結果を成果としてまとめ、原案を発表したことで、参加研究員同士が共通の目標と共同過程、原案に必要な修正について確認することができた。</p> <p>③ セミナーに参加した研究者や大学院生が、セミナー参加者が先駆的な国際共同プロジェクトについて学び、討論に参加することができた。</p> <p>④ 国際協働や海外での看護・助産教育に経験のあるアドバイザーリーボードより評価コメントをもらうことができ、共同プロジェクトの内容や実現可能性の向上が期待できた。ホルツマー氏と話す以前は、研究者育成という色合いが大きかったが、世界の流れから修士課程では、研究を成し遂げるだけのコンピテンシーを得ることは難しく、むしろ研究を理解し、現場に応用できる（Evidence-based practice のできる）Translational researcher を育成する方向に修正を加えた。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>聖路加看護大学参加研究員、事務局</p>	
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 その他の経費（セミナー飲み物代）金額 2,200 円 謝金（アルバイト） 10,000 円 ※アメリカ1名の招聘費用はS-2に含まれる</p>
	<p>タンザニア 国（地域）側</p>	<p>内容 金額</p>
	<p>（ ）国 （地域）側</p>	<p>内容 金額</p>

10-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

① 相手国との交流

派遣先		日本		南アフリカ	計
派遣元		<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
日本 <人/人日>	実施計画			1/7	1/7
	実績			1/7	1/7
タンザニア <人/人日>	実施計画	4/50		1/7	5/57
	実績	4/34		1/7	5/41
<人/人日>	実施計画				
	実績				
合計 <人/人日>	実施計画	4/50		2/14	6/64
	実績	4/34		2/14	6/48
② 国内での交流		3/5	人/人日		

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣時期	用務・目的等
聖路加看護大学・博士研究員・新福洋子	南アフリカ・ダーバン・国際助産師連盟（ICM）	6/18～6/24	世界の助産研究者の集う国際助産師連盟3年毎大会において、本事業によるアジア・アフリカ助産研究センターの発足を発表する。タンザニアの若手助産研究者育成を目的とした日本・タンザニア共同プロジェクトの概要を明らかにし、世界各国の研究者へ意見を求め、プロジェクトの質的充実を図る。
ムヒンビリ健康科学大学・Professor Sebalda Leshabari	南アフリカ・ダーバン・国際助産師連盟（ICM）	6/18～6/24	世界の助産研究者の集う国際助産師連盟3年毎大会において、タンザニアの状況を発表し、日本との国際協働で助産における大学院教育を開始する意向と、そのための国際共同研究について説明する。

ムヒンビリ健康科学大学・Professor Sebalda Leshabari	日本・東京・聖路加看護大学	7/3 ～ 7/15 (研究者交流日程4日)	聖路加看護大学教員、大学院生との交流。聖路加看護大学で行われる講義を見学・参加する。日本の出産施設を見学し、妊産婦の声を聞く。
ムヒンビリ健康科学大学・Dean・Khadija Malima	日本・東京・聖路加看護大学	9月19日～9月29日(研究者交流日程10日)	聖路加看護大学教員、大学院生との交流。聖路加看護大学で行われる講義を受ける。日本の出産施設を見学し、妊産婦の声を聞く。管理者として、また公衆衛生の専門家としての視点で国際協働について話し合う。
ムヒンビリ健康科学大学・Lecturer・Columba Mbekenga	日本・東京・聖路加看護大学	9月19日～9月29日(研究者交流日程10日)	聖路加看護大学教員、大学院生との交流。聖路加看護大学で行われる講義を受ける。日本の出産施設を見学し、妊産婦の声を聞く。地域看護の専門家として、地域における助産師の役割について話し合う。
ムヒンビリ健康科学大学・Lecturer・Dickson Mkoka	日本・東京・聖路加看護大学	9月19日～9月29日(研究者交流日程10日)	聖路加看護大学教員、大学院生との交流。聖路加看護大学で行われる講義を見学・参加する。日本の出産施設を見学し、妊産婦の声を聞く。産科救急・急性期看護の専門家の視点で話し合う。
日本助産学会・理事・毛利多恵子	日本・東京・聖路加看護大学	7月13日、9月27日	国際交流プログラム講義 「人間性あふれる助産ケア」 ブラジル・ネパールでの経験を紹介
聖路加看護大学・博士研究員・新福洋子	日本・東京・東京大学	11月4日～6日	第26回国際保健医療学会学術大会、第52回熱帯医療学会学術大会、合同大会で本プロジェクト過程の発表

【研究交流（日本受入時）参加者】

所属・職名・氏名	受入機関	受入時期	用務・目的等
聖路加看護大学・教授・堀内成子	日本・東京・聖路加看護大学	7月初旬、10月初旬	国際交流プログラム講義 「EBNのグループワーク」 Women-centered Care, EBN実践施設の紹介

聖路加看護大学・ 教授・松谷美和子	日本・東京・聖 路加看護大学	7月初旬、 10月初旬	国際交流プログラム講義 「看護教育カリキュラム」
聖路加看護大学・ 准教授・江藤宏美	日本・東京・聖 路加看護大学	7月初旬、 10月初旬	国際交流プログラム講義 「助産カリキュラム」
聖路加看護大学・ 助教・長松康子	日本・東京・聖 路加看護大学	10月初旬	国際交流プログラム講義 「国際保健－アフガニスタン、フィリピン、インドネシアの経験から－」
聖路加看護大学・ 助教・小黒道子	日本・東京・聖 路加看護大学	7月初旬	国際交流プログラム講義 「女性を中心としたケア」 ミャンマーでの経験紹介
聖路加看護大学・ 助教・八重ゆかり	日本・東京・聖 路加看護大学	7月初旬、 10月初旬	国際交流プログラム講義 「EBNのグループワーク」 「コクランレビュー」

1 1. 平成23年度経費使用総額

	経費内訳	金額 (円)	備考
研究交流経費	国内旅費	18,660	
	外国旅費	2,715,593	
	謝金	1,374,771	
	備品・消耗品購入費	6,614	
	その他経費	884,518	
	外国旅費・謝金に係る消費税	0	
	計	5,000,156	利子使用額を含む
委託手数料		500,047	利子使用額を含む
合 計		5,500,203	利子使用額を含む

1 2. 四半期毎の経費使用額及び交流実績

	経費使用額 (円)	交流人数<人/人日>
第1四半期	0	2/14
第2四半期	2,834,721	7/54
第3四半期	1,486,164	1/3
第4四半期	679,271	0/0
計	5,000,156	10/71